

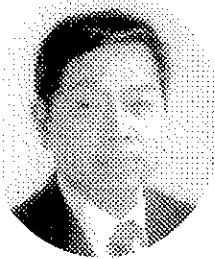
# 静岡大学 理学部 同窓会会報

NO. 23

発行所  
静岡大学理学部同窓会  
静岡市駿河区大谷836  
静岡大学理学部内  
TEL054-237-1111(代)  
会長 浅野安人

## 未来への飛躍を期待して

理学部同窓会会長 浅野安人



静岡大学理学部は、1922年に創設された旧制静岡高等学校を母体とし、1949年6月に設置された国立静岡大学文学部に端を発します。1965年の文理改組により理学部が発足してから39年間、国立大学の理学部として存在しました。2004年4月に国立大学法人となり、組織として大きな変革をしましたが、41年前にもう一度大きな



私が理学部長に就任してから早や1年が過ぎました。私は平成14年に静岡大学理学部に着任し、理学部そのものについての理解が十分な状態で選挙により学部長に選ばれました。そして、理学部の舵取りという重責を背負われ、困惑の中の1年でした。特に、今年度からは大学評価関連の複

時に、宇宙の観察には大きな障害でした。いまやその束縛を解かれて、我々の夢は宇宙へ大きく羽ばたこうとしています。

一方、1969年までの静岡大学の学生実験では、十六進の数字を使用した機械式読取方式の計算機が前時代の遺物として残っていました。しかし、電気回路の実験では真空管を使用していました。この実験でトランジスタやダイオードを使用したのは1972年、その翌年に国産の小型電卓が発売され、3年後の1976年にはLSIの開発が始まりました。その後十六ビットのマイクログロブセッサ、スーパーコンピュータの国産化などの時代を経て、今日のパソコン時代になりました。いま、理化学研究所では10ペタフロップス級の性能を持つ次世代スーパーコンピュータのシステム構成を決定し、2012年にはその完成をめざしています。これは複雑系問題や多階層問題などの革新的な

数の重要な作業があり、過去の理学部を知らない私にとって大きな心の負担となってきました。幸い、理学部内の自己評価委員会の適切な作業と先生方の前向きな協力により、作業は順調に進んでいます。もう一点、最近になって急に、先生方を大きく巻き込んでしまったことがあります。平成19年12月のクリスマスが過ぎ

シミュレーションを先導することになるでしょう。分子の世界の解析も、その観測手段や、コンピュータを駆使した解析手段の進歩とともに大きく様変わりしてきました。遺伝子工学の分野でも、そのデータ蓄積量の大きさと、処理分類のスピードの速さから、いまやDNAの解析にはコンピュータは欠かせません。また、原子や分子レベルでの観測が可能になった今日では、さまざまな化学現象が解明されてきています。いつの時代もサイエンスとテクノロジーは新しい未来を切り開いていくための車の両輪であり、二つの武器です。そして、それが人類へ夢と希望を与えるためには、それを持ち、利用する者の英知と理念が必要不可欠です。静岡大学で培ったさまざまな知識と友人・知人・恩師との人間関係を礎にして、卒業生ならびに修了生の皆さんが今後とも活躍されることを祈念します。

調に進んでおります。工事は平成20年8月に開始され、平成21年2月完成の予定です。平成21年度からは理学部A棟には学生のためのリフレッシュスペースも増え

調に進んでおります。工事は平成20年8月に開始され、平成21年2月完成の予定です。平成21年度からは理学部A棟には学生のためのリフレッシュスペースも増え

### 理学同窓会連絡会 活動報告

○第1回連絡会

- 6月29日(金)開催。今年の活動内容等次のご報告。
- (1)大学院寄付講義 平成19年度は7回実施する。
- (2)キャンパスミュージアム企画 展覧力「南米コロロンビアの蝶と蛾」
- (3)卒業論文抄録集第4集を計画 3月末発行
- (4)同窓会通信23号 3月末発行、全員に配布
- (5)理学部講演会支援 今年度計画なし

※大学院理学研究科講義「同窓会寄付講義II」の日程

- ・第一回、5月10日(木)志澤泰彦氏(平成元年化学科卒)
- ・第二回、5月10日(木)大西新二氏(平成元年化学科卒)
- ・第三回、6月14日(木)藤田雅士氏(昭和53年化学科卒)
- ・第四回、6月21日(木)稲村篤氏(昭和53年化学科卒、平成11年理工学研究科卒)

より良い理学部に発展する良い機会でもあります。この1年を通して感じたことは、このように多くの困難な作業を遂行する中で、理学部の先生や職員の方々の一致団結した前向きな協力が得られてきたことでしょうか。理学部長としては感謝の念に耐えられません。これからの静岡大学理学部の改革と発展には、先輩たちの激励・ご意見・ご支援が必要であります。同窓会におかれましては、これからの理学部を暖かく見守って頂きたいと思っております。以上

### 博士課程修了

○第2回連絡会

- ・第5回、6月28日(木)河合美保氏(平成14年修士課程化学専攻修了)
- ・第6回、7月21日(木)鈴木淳氏(平成元年修士課程化学専攻修了)
- ・第7回、7月5日(木)山崎保寿氏(昭和27年掛川市生、静岡大学教育学部教授)

○第2回連絡会

- 12月29日(土)に理学部同窓会役員会と合同で開催。
- (1)大学院寄付講義の報告
- (2)キャンパスミュージアム企画の実施報告
- (3)卒修了論文抄録集第4集の発行予定
- (4)理学部同窓会通信23号内容及び原稿締切日確認

理学部卒業生より、同窓会名簿について、個人情報保護に関する法律(平成15年5月30日法律第57号)に抵触しているのではないかと、適切な指摘がありました。静岡大学理学部同窓会々則第5条では、本学部の卒業生をもつて一般会員、在校生をもつて学生会員、本学部現職員、旧職員をもつて特別会員、本学部に対し功績のあったもので、理事会により推薦された者をもつて名誉会員とする。本学部及び大学院理学研究科に在籍したところのある者で、希望のある者又は理事会により推薦された者を一般会員とする。この会則に従って、名簿に氏名が記載されていますが、会員からの氏名等記載の拒絶に対応する規定がありません。会の運営並びに会則全

## ご挨拶と理学部の近況と改革

理学部長 村井久雄

長、理学部運営委員会、部内施設マネージメント委員会のメンバーに多くの作業が課されました。これも幸い、全教職員の協力があって、チームワーク良く作業は順

静岡大学理学部同窓会事務局  
静岡市駿河区大谷八三六番地  
静岡大学理学部内  
静岡大学理学部同窓会事務局  
schinaka@schinaka.ac.jp  
平成20年3月10日  
静岡大学理学部同窓会会長 浅野安人

# 退任教員 からの挨拶

数学科

教授 松田 稔

「静岡大学ありがとう、さようなら」



昭和47年1月、まだ学生気分が抜けき

らず、今後の数学者人生に不安一杯の私が、静岡大学理学部助手として赴任して以来、静岡大学という恵まれた環境の下、教育、研究、管理運営等に携わりながら、36年余りの年月を大過なく過ごすことができましたことに感謝します。この間、多くの有能な学生さんや、個性あふれる先生方との出会い、交流等を通して、色々な意味での豊かな数学者生活を送るに満ちた日々を送っていました。特に、私の数学者人生を静岡大学理学部で送ることができたのは、実に幸運であつたと感じています。それは、今の世相のように、性急に短期的に実績を求める風潮ではない「じっくりとマイペースで研究の続けられる雰囲気環境を、若き時代に与えられたからです。当時は、どの数学科教室にも、そのような考え、雰囲気があつたのかも知れません。そのことにより、研究分野が容易に定まらなかつた私が、自分の興味、関心の変化に応じて研究分野の変遷を重ね、過去10年と決別して日本人数学者が足跡を残していなかつた新たな分野に興味を持ち、唯一人30年間歩み続けることが出来ました。その間、「我が相応に成就」と感じる事柄(例えば、Handbook of Measure Theory, Escavier, 2002)において、証明込みで2ページに亘り紹介さ

れている結果。静岡大学理学部紀要も参考文献中にある(等)も、この分野は提示でき、この分野の欧米研究者に「静岡大学」の存在も、初めて知らしめることが出来ました。静岡大学に、少しは恩返しが出来たのかなと考えています。このように、自分の可能性を信じて精進を重ね、歩んできましたが、今や、我が可能性にも増して、「後進の可能性」の尊重こそが、最重要と考えるに至り、早期に職を辞することを決意しました。長期に亘り私を育ててくれた「静岡大学理学部」、本当にありがとうございました。そして、さようなら。

今後の静岡大学理学部同窓生の益々の活躍と、理学部の益々の発展を願っています。

## 物理学科

教授 浅野 勉

「高分子とともに40年」

私が昭和43年4月に



東京から静岡に赴任したときは、修士を修了したばかりの25歳でした。最初のゼミの学生とは年齢が2歳しか違わず、先生と呼ばれるのがさぞはげしい感じでした。あれから40年、高分子の結晶化をX線回折で研究することを中心として約150名の卒業生と沢山の思い出ができました。昨年平成19年12月にゼミの同窓会を行ったときは還暦を過ぎた人から、卒業して間もない若者まで集まっていた大変楽しいひとときを持つことができました。静岡は気候が暖かく自然に恵まれており、私が若い頃は、登山に夢中になりました。ゼミ生にワグネルの学生が来たときに南アルプスにも登りました。私のゼミに来

ると4月から5月は竜爪山や山伏など安倍川沿いの山登りをするのが恒例でした。昭和61年から約2年間ドイツで研究する機会に恵まれ、分子分野で活躍している多くの外国人科学者と知り合いになり共同研究が進みました。また、ヨーロッパの国々の文化の高さと生活の豊かさを痛感しました。静岡に帰ってから国際交流を盛んにしたいと思ひアルバート大学との交流協定でカナダに行つたりしました。平成に入ってから機器分析センターが発足することに、私は初代のセンター長となりました。大型測定機器を共同利用するために理学部はほめ多くの方の協力のもとで何とか総合研究棟に機器を集めてセンターをスタートすることができました。これまでの40年を支えて下さった静岡大学の皆様に深く感謝致します。高分子ゼミの卒業生の皆さん、どうも有難うございました。退職後は「しばらく途絶えていた山歩きをゆくりと始めよう」と思っています。

## 物理学科

教授 石館健男

「ありがとう、さようなら。」



私は、昭和44年11月15付まで理学部物理学科に、レーザーの物性への応用を研究している井上助教の助手として着任しました。当時、レーザーの発明からまだ5年くらいで、井上先生は博士課程時代の研究でいち早くレーザーの開発に取り組んだ、少壮気鋭の研究者でした。当然、研究室のレーザー装置はすべて手作

りでした。私の最初の仕事も大出力の「テラ」レーザーを作成することから始まりました。このような、激しい研究環境の下ですら、井上先生には「ずいぶんと鍛えていただき感謝しています。」

最初の研究は、ガラスレーザーを用いた非線形光学定数の測定でした。以来38年、レーザーを中心とした物性研究を進めてきましたが、途中で井上先生が北海道大学に教授として転出しましたので、石館研究室のスタートは昭和60年ごろからになります。ちょうどその頃、物性研究所(当時六本木の施設利用で、高圧技術の習得や、試料つくりのために院生と一緒に出張しましたが、今となっては六本木の夜を楽しんだこともいい思い出です。また高エネルギー物理学研究所放射光施設で低温高圧部門の実験装置の立ち上げに関係していたので、院生を連れてよく筑波にも出張していました。放射光実験では線源が出る

ときしか実験できないし、その持続時間が当時は不安定だったので、夜中に遠くまで車に分乗して食事に行くことになつた。車社会に便利な土地、筑波での不便さも経験しました。ただ、このような外界と触れることが出来た院生は、苦勞が多い分それだけ鍛えられるわけですから幸せだつたと思います。

研究室運営の一つの試みとして院生は1年生までに修論のための成果を出し、2年目はそれとは別の新たな研究テーマをやらせようという方針を立ててみました。また、修士の研究成果を院生に学会発表させ、学会誌に論文の発表するというものでした。

この試みが成功したのは最初の5年間くらいでした。それは、学生のせいではなく、私の指導力不足と、加えて、研究は楽しみながらうするべきであるということに院生が強調しすぎたせいかもしれません。しかし、振り返って見ますと本当に多くの素晴らしい院生、卒研生に恵まれました。逆に、学生には私の方が元気をもらうことが多かったような気がしています。また、学生を通して、人間は勉強の良し悪しではなく、人間力で決まることもよくわかりました。卒業生には、「ここに改めて心から感謝の意を表します。静大での38年間の有意義な生活も、ようやくここに無事退職を迎えることになりました。皆さん、ありがとうございました。そして、さようなら。」

現在、人類は地球環境、エネルギー、がん、など多くの難問に直面しています。静岡大学で学んだ学生が、これらの難問に果敢に挑戦して、将来に対する不安を払拭し、夢のある社会の実現に貢献してくれることを願っています。

## 物理学科

助教授 平嶋秀治

「静岡大学に赴任から定年まで」

私が静岡大学に赴任してから32年、この間日本は人口減少の時代を迎えています。この少ない時代に直面し、大学も学生数の増加の時代から減少の時代を迎えています。団塊の世代の急激な学生増を教員増なしで乗り切る為

に作られた、2年間の教養部が廃止されたのもその一つです。私も、2005年10月に教養部から理学部所属になりました。大学生活も学生運動・麻雀の時代から、コンピュータの時代へと変化しました。私は、旧制大学の雰囲気が残る教養部に赴任

以来、おもに「光」情報とコンピュータ「職業と倫理」など総合科目の教育を、他の科学や人間との関連を意識して担当してきました。専門の研究も、広い視野から化学全般を研究してきました。特に、常に有らゆる科学に興味を持って、炎の中などで起こっている原子状態素挿入反応と言ふ、最も単純なカーボンの反応をマイクロ波分光法やフラーレンの合成、量子化学計算など様々な手法で研究してきました。

面器一杯、クサギの実を採集して、静大の自然の豊かさを実感しました。この40年間、構内で見られる四季の移り変わり、理学部が充実してゆく様子、また学生気質の変化など、様々なことを学ぶ事ができました。これらは、多くの方のお陰であり、長く勤めたお駄賃かとも思っています。木々の花を眺めながら、また鳥の声を聞きながら登校できたことは、私の静大の誇りでした。有難うございました。

生物科学科 講師 調子昭一

「幼少の頃から病弱で」

私は幼少の頃から病弱で、骨と皮のようになっていた。家が貧しく、高校生の中から日本育英会の奨学金を借りていた。病弱と貧乏は、ある意味、同義語だつたかもしれない。高校生

の頃の私の願望は、どうにか成人するまで生きたい、つまり、20歳になるまで生きたいということでした。その願望が達成された時、私は静岡大学理学部理学部の学生でした。その後、いわば余生のようなもので、だらだらとただ生きてきただけのよう気がします。受験大学を選んだ時、第1志望は大学を選んだが、第2志望は気候風土を選びました。静岡大学は第2志望でした。静岡大学を選んだのではなく、静岡を遠征したのです。当時、静岡は老人の町として知られ、気候温暖、人情温和、天災なし、ゆるま湯に浸かった地域でした。未知の地だつたが、来てみると、その通りだつた。これは体に良さそうと思ひました。静岡の気候風土と下宿のおばさんのおかげで、すっかり健康体になり、遅く東大大学院の植物学に入学できました。植物学を選んだのも体に良さそうと思つたからです。その後、新設の静岡大学理学部の助手に採用され、沈香も焚かず屁もひらず、倦眼をむさぼり続けました。最後の1年1ヶ月は、天岸学長や相原学部長や山内学部長や教室の皆様の尽力により講師に任じていただきました。骨と皮の少年は肥満体の老人になり、定年退職を迎えました。私は長男です。退職後は郷里に戻り、親の介護や先祖の墓守をするつもりでしたが、どうも親や弟が良い顔をしないのです。私は生きて故郷に戻るのではなく、死んで骨になつて戻る予定になつていたようです。私が若死にしていれば、無為に40年間も貴重なホストを占有することもなく、優秀な人を採用できたのと思うと、大学に多大な迷惑をかけてしまったことに気付きました。親や兄弟の人生設計を狂わすこともなかつたのにと思ひます。生きていてごめんない、そして、静岡にありがとう。今言えるのは、これだけです。悩んでいます。あるいは、悩んでいるふりをしています。

地球科学科 教授 新妻信明

「静岡と地球科学」

1978年4月に理学部に新設された地球科学科へ赴任してから30年経ち、定年退職を向かえることになりました。1960年代のプレートテクトニクス確立から始まった地球科学の大革新時代を静岡で過ごすことができたことは幸運でした。

りでした。私の最初の仕事も大出力の「テラ」レーザーを作成することから始まりました。このような、激しい研究環境の下ですら、井上先生には「ずいぶんと鍛えていただき感謝しています。」

最初の研究は、ガラスレーザーを用いた非線形光学定数の測定でした。以来38年、レーザーを中心とした物性研究を進めてきましたが、途中で井上先生が北海道大学に教授として転出しましたので、石館研究室のスタートは昭和60年ごろからになります。ちょうどその頃、物性研究所(当時六本木の施設利用で、高圧技術の習得や、試料つくりのために院生と一緒に出張しましたが、今となっては六本木の夜を楽しんだこともいい思い出です。また高エネルギー物理学研究所放射光施設で低温高圧部門の実験装置の立ち上げに関係していたので、院生を連れてよく筑波にも出張していました。放射光実験では線源が出る

ときしか実験できないし、その持続時間が当時は不安定だったので、夜中に遠くまで車に分乗して食事に行くことになつた。車社会に便利な土地、筑波での不便さも経験しました。ただ、このような外界と触れることが出来た院生は、苦勞が多い分それだけ鍛えられるわけですから幸せだつたと思います。

研究室運営の一つの試みとして院生は1年生までに修論のための成果を出し、2年目はそれとは別の新たな研究テーマをやらせようという方針を立ててみました。また、修士の研究成果を院生に学会発表させ、学会誌に論文の発表するというものでした。

以来、おもに「光」情報とコンピュータ「職業と倫理」など総合科目の教育を、他の科学や人間との関連を意識して担当してきました。専門の研究も、広い視野から化学全般を研究してきました。特に、常に有らゆる科学に興味を持って、炎の中などで起こっている原子状態素挿入反応と言ふ、最も単純なカーボンの反応をマイクロ波分光法やフラーレンの合成、量子化学計算など様々な手法で研究してきました。

生物科学科 講師 調子昭一

「幼少の頃から病弱で」

私は幼少の頃から病弱で、骨と皮のようになっていた。家が貧しく、高校生の中から日本育英会の奨学金を借りていた。病弱と貧乏は、ある意味、同義語だつたかもしれない。高校生

の頃の私の願望は、どうにか成人するまで生きたい、つまり、20歳になるまで生きたいということでした。その願望が達成された時、私は静岡大学理学部理学部の学生でした。その後、いわば余生のようなもので、だらだらとただ生きてきただけのよう気がします。受験大学を選んだ時、第1志望は大学を選んだが、第2志望は気候風土を選びました。静岡大学は第2志望でした。静岡大学を選んだのではなく、静岡を遠征したのです。当時、静岡は老人の町として知られ、気候温暖、人情温和、天災なし、ゆるま湯に浸かった地域でした。未知の地だつたが、来てみると、その通りだつた。これは体に良さそうと思ひました。静岡の気候風土と下宿のおばさんのおかげで、すっかり健康体になり、遅く東大大学院の植物学に入学できました。植物学を選んだのも体に良さそうと思つたからです。その後、新設の静岡大学理学部の助手に採用され、沈香も焚かず屁もひらず、倦眼をむさぼり続けました。最後の1年1ヶ月は、天岸学長や相原学部長や山内学部長や教室の皆様の尽力により講師に任じていただきました。骨と皮の少年は肥満体の老人になり、定年退職を迎えました。私は長男です。退職後は郷里に戻り、親の介護や先祖の墓守をするつもりでしたが、どうも親や弟が良い顔をしないのです。私は生きて故郷に戻るのではなく、死んで骨になつて戻る予定になつていたようです。私が若死にしていれば、無為に40年間も貴重なホストを占有することもなく、優秀な人を採用できたのと思うと、大学に多大な迷惑をかけてしまったことに気付きました。親や兄弟の人生設計を狂わすこともなかつたのにと思ひます。生きていてごめんない、そして、静岡にありがとう。今言えるのは、これだけです。悩んでいます。あるいは、悩んでいるふりをしています。

地球科学科 教授 新妻信明

「静岡と地球科学」

1978年4月に理学部に新設された地球科学科へ赴任してから30年経ち、定年退職を向かえることになりました。1960年代のプレートテクトニクス確立から始まった地球科学の大革新時代を静岡で過ごすことができたことは幸運でした。

プレートテクトニクス確立には海洋地質学が中心的な役割を果たしましたが、静岡大学地球科学科は海洋地質学講座を国内で初めて新設しました。この講座には、米国の深海掘削計画に参加し太平洋のプレート運動を明らかにされ、日本海溝域の深海掘削航海の首席研究員を務められた岡田博有教授がおられ、新たな地球科学の枠組を構築しようという活気が学科全体に満ちておりました。

プレートテクトニクスでは静岡は、地球上で最も多くのプレートが衝突し合う地域にあり、卒業論文や修士論文の野外調査のテーマには「とかず、学生も夏冬の講義のない期間に100日以上の野外調査を行い、現在では常識とされている、プレート運動によって伊豆半島が本州に衝突していること、伊豆半島衝突の前に丹沢が衝突したことを次々に明らかにしてきました。その成果を土台に1980年代の国際リソスフェア探査開発計画の課題「南部フォッサマグナにおける衝突現象の解明」を静岡大学が分担し、国内の大学、研究機関と協力して伊豆の衝突現象を地質学・地球物理学の垣根を越えて総合的に解明することができました。未だプレートテクトニクスに懐疑的な研究者が多かった当時ですが、この協同研究を通してプレート運動によって伊豆・丹沢が衝突したというプレートテクトニクスの枠組を日本国内に浸透させることができたのも大きな成果でした。

静岡大学では、深海掘削とともに陸上学術ボーリング計画の推進や、地球環境

解明のための同位体分析、東海地震を予知するためのレーザー光波測距などを手掛けてきましたが、それなりの成果を上げていくことができました。地球科学の発展のために何が必要かを常に討論し、研究に協力下さった理学部地球科学科の教職員・学生の皆様のお陰です。静岡は、地球上で最も激しいプレート運動の表れている所で、地球科学についての討論や研究には最も適した地域です。この恵まれた静岡大学が、今後も地球科学の発展において国内はもとより国際的にも重要な役割を果たされることを期待いたしております。

### 新任教員からの挨拶

数学科基礎数理講座 教授 浅芝秀人

私は、昨年4月に大阪市立大学から転任してきました。専門は、多元環の表現論という代数学の一分野です。1970年代に、有向グラフの表現による多元環上の加群の表示法が導入され、アウズランダー・ライテン理論が構築されて以来、急速に発展してきた分野で、これは現在、数学の他の分野や物理学とも関連を持ち、活発に研究されています。趣味は、音楽鑑賞と演奏、読書、言語の学習などです。主に使っているパソコンはマッキントッシュ、最も長く滞在した外国はドイツです。

「良好な環境」 阪市立大 年4月に大

静岡大学では、学問的にとても良好な雰囲気がある中で、楽しく研究でき、学生の

皆さんには、旺盛な向学心があり、理解することに喜びを感じてくれていますので、楽しく講義できます。ここでの生活で気に入っている点は、まず、気候が穏やかで、農産物や海産物に富んでいて、水や空気も（大阪とは比べ物にならないくらい）きれいなことです。さらに、空気の澄んだ日には研究室の窓から神々しい富士山が見える点です。富士山には、様々な表情があるところを知り、驚いています。他にも驚いたことは、サイエンスカフェという企画が毎月行われ、最新の科学的研究成果にふれる機会が市民に開放されていることです。私も一市民として参加し、楽しませてもらうつもりです。いろいろな演奏会が開催されていることも考えあわせると、静岡は大変文化的な都市だと感じます。さらに現在の住居は、そのようなセンターにも、大学にもすぐに行けるという恵まれた立地条件にあるという点も気に入っています。通勤に約1時間半もかかっていた去年までは大きな違いです。これからは、豊かな自然と県内の観光地を探検できることも楽しみにしています。良好な環境で、生活を楽しまながら、楽しく仕事ができることを、大変ありがたく思っています。どうぞよろしくお願いたします。

「個人的温暖化現象」 教授 坂本健吉

静岡大学には、学問的にとても良好な雰囲気がある中で、楽しく研究でき、学生の

温暖化現象について述べて、ご挨拶に代えさせていただきます。仙台は梅雨明けまでは時々コタンが必要になるのですが、静岡では赴任当日の4月1日に30.7℃の真夏日を体験しました。この日の静岡は日本一暑かった！。また、5月には近所でハイビスカスの花が地植えで咲いているのを見つけた。ハワイかと一瞬目眩がしました。しかし、それは序の口、赴任直後で研究室にはエアコンがなく、7月の昼下がり、試しに窓を閉め切ってみると室温はなんと50℃を越えるありさま。申し遅れましたが、私の専門は有機化学で、沸点が低い有機溶媒を使って実験しています。50℃といえは、よく使っているエーテルやジクロロメタンなんかは、一瞬にして蒸発してしまう温度ですから、もちろん実験なんか出来ません。もちろん窓を開ければいくら涼しくなりますが、

「個人的温暖化現象」 教授 坂本健吉

静岡大学には、学問的にとても良好な雰囲気がある中で、楽しく研究でき、学生の

「学生と力を合わせて」 准教授 加藤知香

「個人的温暖化現象」 教授 坂本健吉

静岡大学には、学問的にとても良好な雰囲気がある中で、楽しく研究でき、学生の

組んでくれたことは有難かつたです。お陰で、ようやく本格的に研究が進められる状況になりつつあります。ただ、来年度は私の研究室のある理学部棟の改修工事があり、学生にはまた色々面倒をかけてしまうかもしれません。そんな状況でも、なんとか学生と力を合わせて、また多くの先生方や事務職員の方にも助けていただきながら、静岡大学での教育、研究活動に尽力していきたいと思っております。これからもどうぞよろしくお願いたします。

「個人的温暖化現象」 教授 坂本健吉

静岡大学には、学問的にとても良好な雰囲気がある中で、楽しく研究でき、学生の

「個人的温暖化現象」 教授 坂本健吉

「個人的温暖化現象」 教授 坂本健吉

静岡大学には、学問的にとても良好な雰囲気がある中で、楽しく研究でき、学生の

「個人的温暖化現象」 教授 坂本健吉

「個人的温暖化現象」 教授 坂本健吉

静岡大学には、学問的にとても良好な雰囲気がある中で、楽しく研究でき、学生の

### 第15回 肝細胞研究会学術集会

生物科学科の塩尻教授ら理学部の教員が中心となり、本年6月27、28日に静岡市駿河区の静岡県男女共同参画センター「あざれあ」で第15回肝細胞研究会学術集会が開催されます。2006年の人口動態統計によると肝臓ガンで亡くなった人は3万3千人で肺ガン、胃がん、大腸ガンに次いでいます。肝機能を改善・再生させる研究の進展のために、静岡大学理学部同窓会もこの学術集会を支援したいと思っております。

「個人的温暖化現象」 教授 坂本健吉

静岡大学には、学問的にとても良好な雰囲気がある中で、楽しく研究でき、学生の



静岡の海岸、富士川河口や富士山麓湧水群に見る生物の多様性について、貝形虫類 Microzoocumia 属などの生態と種分化を例にして説明した。

静岡の海岸、富士川河口や富士山麓湧水群に見る生物の多様性について、貝形虫類 Microzoocumia 属などの生態と種分化を例にして説明した。

静岡の海岸、富士川河口や富士山麓湧水群に見る生物の多様性について、貝形虫類 Microzoocumia 属などの生態と種分化を例にして説明した。

静岡大学理学部では、毎月最終木曜日にオープンゼミを開催しています。会費は無料です。皆さんの参加をお待ちします。

静岡大学理学部では、毎月最終木曜日にオープンゼミを開催しています。会費は無料です。皆さんの参加をお待ちします。

静岡大学理学部では、毎月最終木曜日にオープンゼミを開催しています。会費は無料です。皆さんの参加をお待ちします。

静岡大学理学部では、毎月最終木曜日にオープンゼミを開催しています。会費は無料です。皆さんの参加をお待ちします。





写真1: エラータオバセセリ、羽を広げると幅約5cmの大型種

1967年6月から9月にかけて、第1次静岡大学コロンビア・アンデス学術調査隊が組織され、開学以来初めての海外学術調査を行いました。当時理学部地学履修コースの土隆一助教授を隊長とした地質、動植物の調査、そして静岡大学山岳会によるサンタ・マルタ山群の未踏峰への挑戦が行われました。山岳会のメンバーは、南米大陸の最北端ベネズエラ国境に近いサンタ・マルタ山群の最高峰ピコ・クリストバルコロン(5775m)の登頂に成功し、途中未踏の峰に登頂記念としてピコ・デ・シズオカ「静岡連峰」と命名しました。その時の学術調査で採集された蝶と蛾約3千点がキャンパスミュージアムに保管されています。不思議な色彩を放つモルフオチウの1種ロドプテロンなど貴重種を含めた大型コレクションです。当時、学術調査に参加された元日本鱗翅学会会長高橋真弓氏の協力により、展示公開を企画し、平成19年11月17日(土)から22日(木)までの6日間、キャンパスミュージアム(理学部B棟1階)で開催されました。また、静大祭期間中の11月17、18日の両日、ミュージアム内で高橋氏の講演会が行われました。



写真2: マエモンジャコウアゲハ(有毒)



写真3: シロチヨウ科の一種(無毒)、マエモンジャコウアゲハ(有毒)に擬態する



写真4: ウラモジタテハ、羽長は約2.5cm



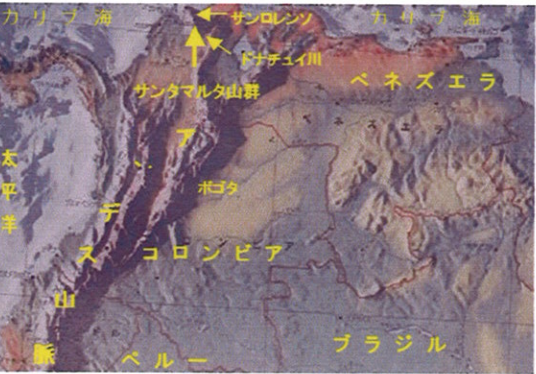
写真5: 花の蜜を吸うスカシマダラ科の一種



写真6: ロドプテロン・モルフオチウ



写真7: ミヤマルリジャンノメ広げた羽は約4cm



### 2007年度理学部ニュース

- 3月 佐藤宏樹教授(数学科)が翻訳書「フィボナッチのうさぎ」を刊行
- 4月7日 平成19年度入学式挙行
- 4月12日 三重野哲教授(物理学科)がJ-JAP編集貢献賞を受賞
- 5月 徳元俊伸教授(生物科学科)が環境ホルモンの新作用分子発見(静岡新聞)
- 5月24-25日 平成19年度国立大学法人14大学理学部長会議が、ホテルセンチュリー静岡を会場に開催される(本学理学部が担当大学)。
- 6月29日 関東駿信越5大学理学部連携協定が締結されました。
- 7月 徳元俊伸教授(生物科学科)の論文が内分泌研究会の話題に国際内分泌学会(The Endocrine Society)発行のニュース2007年7月号に掲載
- 7月25日 女子高校生とその保護者及び教育関係者を対象に「輝け! 未来の女性サイエンティスト from 静岡」と銘打った公開講座をベガサートで開催
- 8月24日 富山大学水素同位体科学研究センターと静岡大学理学部付属放射化学研究施設との間に研究連携・協力に関する基本協定が締結されました。
- 9月4-7日 数学基礎論サマースクール2007を開催(共通教育棟B401)
- 9月26日 増澤武弘教授(生物科学科)がNHKの「クローズアップ現代」にて富士山に見られる地球温暖化の兆候を指摘
- 9月26日 吉河朗君(創造科学技術大学院大学博士課程2年)と森友隆君(理工学研究科物質科学専攻博士課程3年)が、2007年日本放射科学会・第51回放射科学討論会にて若手優秀賞を受賞
- 10月13日 尾串雄次君(創造科学技術大学院大学博士課程1年)が第32回日本比較内分泌学会にて若手研究者最優秀発表賞を受賞
- 2月3日 梶 智就君(大学院理学研究科修士課程2年)が、日本古生物学会第157回例会において、優秀ポスター賞を受賞
- 2月15日 数学科 松田 稔教授の最終講義(理学部B202)
- 2月19日 物理学科 浅野 勉教授の最終講義(理学部B202)
- 2月29日 地球科学科 新妻信明教授の最終講義(理学部B202)
- 3月22日 理学部卒業式が開催される。(静岡ペルージャ)

詳しくは静岡大学理学部ホームページをご覧ください。  
http://www.shizuoka.ac.jp/rigaku/

展示会を訪れた学生、教職員、OBの方々は、静岡大学の学術研究史のひとつと、南米コロンビアの自然と地球環境と生物の巧妙な機能と多様性を堪能していた。

1500メートル以上にすむ鳥類の3分の2以上はこの山群の固有種であるという。第1次静岡大学コロンビア・アンデス学術調査によりこの山群とその周辺で採集された蝶類は約5百種、3千個体で、科別の種類数

(2)マエモンジャコウアゲハ(Parides areas) 同属の2種とともにカリブ海側山麓の熱帯多雨林に見られた。この属の蝶は幼虫がウマノスズクサ科植物を食べるために体内に有毒成分を含み、鳥類など捕食者からの攻撃を受けにくい。これとは類縁の遠い無毒な

(5)ロドプテロン・モルフオチウ(Morpho rhodopteron) 羽の表面は美しい青紫色

平成19年度静岡大学キャンパスミュージアム企画展  
—静岡大学キャンパスミュージアム資料公開—  
**南米コロンビアの蝶と蛾**  
—大陸の孤立地塊サンタ・マルタ山群の自然—

(1)エラータオバセセリ(Pyrrhopyge aetata) ナンベイアオバセセリの1種。日本産アオバセセリよりもはるかに大形で標高2千メートルぐらいの地帯にすむ。この山群の固有種で、北西麓サンロレンソ付近の森林地帯に多産する。世界に語句僅かの標本しかない貴重なもの。(写真1)

(4)スカシマダラ(Miraltea cymothoe) この仲間には南米に数10種が分布している。羽に鱗粉(りんぷん)がほとんどなく透明になり、翅脈(しみやく)がはつきりとわかる。森林の内側やその周辺をゆるやかに飛ぶ。この仲間は体に有毒成分を持ち、鳥からの攻撃をまぬがれている。(写真4)

(6)ミヤマルリジャンノメ(Lymanopoda caeruleata) この山群の固有種。一般に地味な色あいのジャンノメチョウ類中の美麗種でもある。ドナチユイ川沿いの海拔1500から2400メートルの森林地帯に見られる。川沿いの砂地で吸水する。(写真7)

(3)ウラモジタテハ(Diethria marchalii) 中南米特産の美しいタテハチョウで、後羽の裏面に89の模様がある。この仲間は熱帯から亜熱帯にかけて分布し、ブラジルなどには88の模様をもつ種もある。この山群の東南側を流れるドナチユイ川では河原の砂地で吸水するのが見られた。(写真2)

(7)ミヤマルリジャンノメ(Lymanopoda caeruleata) この山群の固有種。一般に地味な色あいのジャンノメチョウ類中の美麗種でもある。ドナチユイ川沿いの海拔1500から2400メートルの森林地帯に見られる。川沿いの砂地で吸水する。(写真7)

(8)シロチヨウ科の一種(無毒)、マエモンジャコウアゲハ(有毒)に擬態していることがある。(写真3)

### = 2007年度新刊本の案内 =

- ☆「フィボナッチのうさぎ」 キース・ポール著、佐藤宏樹・佐藤かおり訳 育社、pp.312  
記者は、数学科教員とサイエンスライターの令嬢。"Strange Curves, Counting Rabbits, and Other Mathematical Explorations"(プリンストン大学出版局、2003年刊行)の全訳である。数学は美しさと神秘性をもちあわせ、私たちに好奇心と想像/創造力を与えてくれる。そういった意味で、本書は数学愛好者や、研究者、教師、学生にとって第一級の啓蒙書といえる。
- ☆「同位体地球化学の基礎」 J.ハフス著、和田秀樹・服部陽子訳 シュプリンガー ジャパン、pp.383  
記者は、地球科学科教員と卒業生。進展目覚ましい同位体を通して見えてきた、宇宙と太陽系の系譜、地球のなりたち、古気候、現代の環境問題と環境汚染の源に関する教科書
- ☆「化石の科学」 H.A.アームストロング、M.D. プレイジャー著、池谷仙之・鎮 西清隆訳 朝倉書店、pp.276  
記者池谷は、静岡大学名誉教授、地球科学、地層に多量に含まれる微小な化石を通してみる地球の歴史、地球生物圏の広さとその詳細な記録を解説する。
- ☆「プレートテクトニクス—その新展開と日本列島—」 新妻信明著 共立出版、pp.292  
著者は、この3月定年退職する地球科学の教授、動く地球、生きている地球、ダイナミックな地球の活動を理解するための鍵となる理論であるプレートテクトニクスの教科書 (和田秀樹)



共同研究希望テーマ

○肝臓並びに皮膚とその派生物の発生・再生の分子細胞生物学と再生医学への応用

生物科学科

教授 塩尻信義

肝臓原基内肺葉細胞や肝芽細胞は、増殖能力・分化能力・組織形成能力に富む発生器の肝マテマセルである。その増殖・分化特性を明らかにすることにより、細胞交代型ハイブリッド型人工肝臓の開発、細胞移植治療への応用、ES細胞から肝臓形成への制御などの基礎データを収集できる。肝芽細胞の生存を

共同研究シリーズ集2007

共同研究シリーズ集2007から、理学部関係の共同研究希望テーマと技術相談内容を紹介します。内容の詳細等は、国立大学法人静岡大学イノベーション共同研究センターにお問い合わせください。

女性ホルモン作用の評価

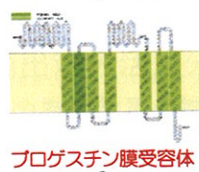
生物科学科

准教授 徳元俊伸

多くの脊椎動物の卵は卵成熟と呼ばれる最終段階を経て受精可能な卵として生み出される。この過程にはス

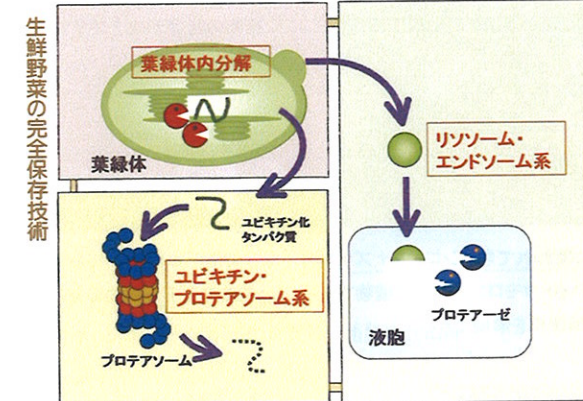
新規ステロイドホルモン作用の評価技術

受容体遺伝子を用いた試験管内反応



プロゲステロン膜受容体

新規環境ホルモン作用(プロゲステロン様作用)物質の評価技術



生鮮野菜の完全保存技術

生物科学科

准教授 天野豊己

テロイドホルモンによる減数分裂の誘起と排卵誘起の作用が必要である。内分乱物質が減数分裂誘起の作用を持つこと、これをゼブラフィッシュ生体に直接作用させることにより、物質のホルモン作用(女性ホルモン様作用、男性ホルモン様作用、またはこれらの拮抗作用)を数時間内で検定できる生体内反応による評価方法を確立した。

収穫による切断を受けた植物は、呼吸を高めてエネルギーを生産し、そのストレスに耐えようとする。このときのエネルギー源となるのが、細胞内のタンパク質である。たんばく質分解の進行は、植物の栄養価の減退と風味の低下をもたらす。しかし、その分子構造があらからでな

環境シグナルによらずに花芽を誘導する技術開発にむけて

生物科学科

准教授 木崎曉子

多くの植物は、生息する環境でもっとも有利に繁殖するために、光や温度などの外部の環境シグナルを利用して開花磁気を制御している。しかし、作物などの場合、栽培時期の変更、栽培地の移動、気候変動などがあると、この外

部環境シグナルによる開花制御がもたらす不利に働く場合がある。現状の技術では、花芽を誘導するために、夜間照明や温度コントロールなど余計なエネルギーがかかり、環境への負荷が大きくなっている。植物が自身のシグナルによって花芽をつけることができないトウモロコシの花芽制御の仕組みを解明することで、植物の花芽形成を任意に制御する技術の開発が期待できる。

超分子結合による機能性ナノ集合体の創生

化学科

助教授 山中正道

超分子結合によるナノサイズのナノ集合体は内部に独立した空孔(キャビティ)を持つ。このキャビティに閉じ込められた(包接)ゲスト分子は、不安定な分子が安定化されるなど、バルクに存在するときとは異なる性質を示すことが知られている。水素結合と配位結合を積極的に取り入れて設計された、基本単位となるユニット分子を有機合成化学的手法によって合成し、これらの自己集合によるナノ集合体の形成、キャビティへのゲスト

ト分子の包接をZnOなどの機器分析装置を用いて確認する。ここで得られた結果を字勢田製のナノセル設計にフィードバックし、より完成度の高い長分子ナノ集合体の創生を行う。

酵母を使ったバイオアクセス、タンパク質・二次代謝産物の生成

生物科学科

准教授 丑丸敬史

・出芽酵母を用いたタンパク質発言系構築・外来タンパク質の機能検定・スクリーニング

・Yeast Hybrid法によるタンパク質間の相互作用の検定

バイオアクセス、情報処理、フロッピー制御

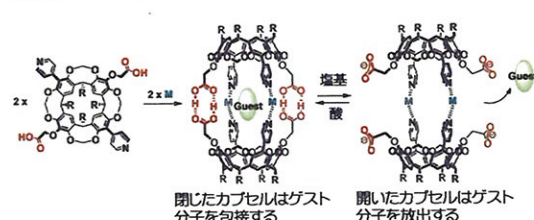
生物科学科

准教授 竹内浩明

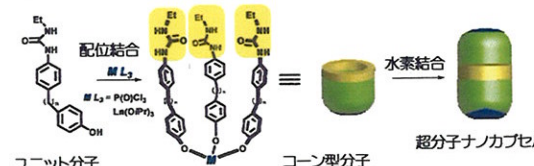
・行動学的解析(聴覚的識別、声紋解析、神経伝達物質関連の行動薬理学、脳の局所刺激・破壊)

超分子結合によるナノサイズカプセル生成のイメージ図

外部刺激によって開閉する超分子カプセル



多成分自己集合による超分子ナノカプセルの形成



物理学の近況

今年度末で、物理学科教員3名、浅野勉教授、石館健男教授、平嶋秀治助教が定年退職となる。昨年度、天岸学長が任期満了で退職し、山際啓一郎教授が定年退職した。一昨年度には、鈴木武彦教授が定年退職した。よって、80年代教鞭を取ったベテラン教員は、新しい教員に入れ替わることとなる。来年度、素粒子、光物性、ソフトマター分野の若手研究者が着任し、積極的な研究・教育活動が期待されている。

組織学的解析全般、遺伝子工学全般、培養

生物科学科 准教授 小池 亨

・発生・再生過程における肝臓の組織形成に関わる分子の実体の解明

・幹細胞からの肝細胞分化誘導の分子機構の解明

・遺伝子工学的各種手法および組織学的解析手法全般

問合せ先 国立大学法人静岡大学イノベーション共同研究センター

浜松市中区城北3-5-1 電話 053-476-1704

静岡オフィス 静岡市駿河区大谷836 電話 054-236-4031

の科学新聞)。三重野 哲教授は、応用物理論文誌(JAP)の積極的な編集活動に対して編集貢献賞を受賞した(2/24に応用物理学会より)。

教育において、創造大学院に3名の教員が所属し、博士課程の研究・教育指導を行っている。理学研究科修士課程物理学専攻には定員14名を越える応募が毎年あり、盛んな大学院指導が行われている(推薦入学制度も実施)。研究費削減で厳しい時では有るが、理料系求人が活況であり、高い就職率を維持できている。

一方、学部教育では、共通教育棟の物理学学生実験室が改修され、より良い実験環境が実現されている。ここでは、高校・大学連携の実験講座が開かれた(8月)。

今後、授業改善活動(FD活動)、施設改善にてより良い学部教育活動の展開も期待されている。

物理学科教員 三重野 哲



# 同窓会寄附講座

「偶然をつなぐ触媒」

志澤泰彦

現在、私は私立大学の短期大学部で基礎化学を教えながら、細々とあるが微生物の酵素の研究をしている。思えば、このような領域に足を踏み入れたことがなかった。3人の先生方との出会いがあったように思う。

一人目は、中学校時代に英語を教えた担任の先生。

二人目は、化学科時代に指導くださった故橋爪裕司教授。

三人目は、現、生化学グループ 瓜谷真裕教授である。

私は、大学1年次の夏休みを利用して、中学校時代の英語の先生の勧めで英国カンタベリーへ短期留学をした。ヒースロー空港からヒートリア駅まで順調な旅程であったが、カンタベリー行きの列車が2系統あることを知らず、遠回りの系統の列車に乗りこんでしまった。さらに悪いことに途中で列車を一部切り離すとかで、車掌さんからも前の車両に移るよう促された。しかたなく、車両を移動すると、車窓から差し込む朝かとした日差しのもとで読書する白髪の小柄な老紳士に出会った。私は、「失礼ですが、静大の橋爪先生でしょうか？」と伺った。先生は「失礼ですが、静大の橋爪先生ではないかと推測しますが、どうも失礼な感じがしますか？」と何の躊躇もなく話しかけた。柔らかな声の通った口調で、「どうですか。橋爪です。」とお答えになった。先生はカンタベリーのセント・メアリーズ大学の研究のため向かう途中で、「この偶然をお互い本心に驚きがあった。」

帰国後も先生の研究室には時より寄せてもらい、生化学の研究についてお話をしてくださったこともあって、私は高校時代に生物学にはあまり興味もなく勉強していたが、生物を化学で理解することにとても興味を覚えた。当時、生化学教室は人気が高かったため、たしか抽選の末、無事加わることができ、橋爪研において卒業研究をするようになった。

この卒研時代に瓜谷先生とは日夜、研究やサイエンスについて語り合い、多岐に亘るサイエンスマインドを叩き込まれた。そのときの実感が私にとっては貴重な糧になっている。現在でも先生には研究について相談に乗っていただいたりしており、大変感謝している。

このように偶然が偶然を次々に生み出してくだらうが生まれ、自分史が出来上がっていく。事を最近強く感じようになっている。理学部の同窓会という組織も、組織は人なりというように、人と人との有機的なネットワークがその核となると、ただ大きく発展するだけではない、柔軟な可塑性を秘めたものに変化するであろう。今回、静大理学部寄附講座において、予想以上にたくさんの方の現役の学生さんにお会いし、お話できたことが、学生諸君また同窓会の発展に対していささかも正触媒となれば大変光榮です。

最後に、後輩諸氏に思いを伝える気持ちになった方がおられましたら、理学部同窓会に連絡してみたいかかでしょうか。聴講してくれる学生さんの真剣さに感動しますよ。

このたびは静岡大学理学部同窓会寄附講座にお招きいただき大変感謝しております。学生の時分よりお世話になり、

このような機会を与えてくださった瓜谷真裕教授にこの場を借りて御礼申し上げます。

化学科 平成元年3月卒業  
日本大学短期大学部生物資源科勤務

「通信産業の変化と大企業ベンチャー企業の違い」

大西新二

18年前に化学科を卒業して大手通信企業に就職した私は化学、研究、大学とは無縁の日々を過ごしていました。6年前にベンチャー企業設立に参画しましたが、昨年3月に上場したこともあり、そろそろ新卒採用の検討をしようと考えていました。理学部では通信系の仕事に興味を持つ学生は少ないだろうと思いつつも、まずは自分の判断基準的な意味合いで「母校の学生が今どんな将来を考えているのだろうか」という素朴な疑問があり、同期で研究を続けている友人に相談してみたところ、きっかけで今回の機会を賜りました。

瓜谷先生から、「課外授業よろこび先輩(NHK)の静大理学部版のようなものだよ」と聞いて少し気が楽になりました。理学部寄附講座は、ききもの学生たちが就職や将来を考える時の参考になればと考え、一つは現在大きな変革が始まりつつある通信業界について、もう一つは大企業とベンチャー企業の違いについて両方を経験した一人の卒業生の意見の2点をお話しさせて頂きました。

学生たちは受容性豊かな雰囲気聞いてくれて、後日レポートも拝読しましたが、少なくとも母校の後輩たちにおいては18年のギャップはそれほど大きくなく、(その良し悪しは別として)どこまで自分との共通性を感じ取ることができました。

当日は数時間の滞在でしたが、準備の期間も含めて母校愛を感じる貴重な機会でした。また、日頃のビジネスの中にはない刺激と感覚を得ることができました。今後この企画がより良い形で継続、発展されることを祈念致します。ありがとうございました。

化学科 平成元年3月卒業  
㈱ネクストジョン勤務

私は、化粧品会社の研究開発職に就く立場から、化粧品というものの意義、重要性や実際の仕事内容について講義をさせて頂いたいただきました。最初に瓜谷先生からお話をいただいた時は、正直お受けするが少し迷いました。大学院を出て5年目でまだ社会経験も浅い私に、学生の皆さんにとって有益なお話がとまどまどできるだろうかと考えたからです。しかし、就職活動から現在に至るまでの赤裸々な体験や、この職業・職種に就いて思うこと、学生さんへの期待やメッセージを私なりの言葉でお話することにしよう、お一人でも何かを感じていただけたらと思ひ、瓜谷先生の温かい言葉に背中を押されながらお受けすることにしました。当日も、自分の講義内容に果たして興味をもってもらえるのだろうか不安もありましたが、実際の講義では学生さんが目を輝かせながら興味深い様子で聴講してくださり、そのような心配は杞憂に終わりました。また講義後の質疑応答では素朴な疑問はもちろ

ん、学生さんならではの視点からの質問内容に私自身驚きながら、非常に有意義な時間を過ごすことができました。むしろ学生さんの好奇心の強さに私のほうが学び、励まされ、またこの経験が自分自身の成長にも繋がったように感じ、講義をさせて頂いたことに本当に良かったと思っています。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった瓜谷先生に改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

化学科 平成元年3月卒業  
㈱ネクストジョン勤務

部同窓会の益々の発展をお祈りいたします。

演題名：「花王における差別化された商品の開発研究」

講演要旨：消費者の嗜好性が多様化している昨今、メーカーとして他社よりも魅力ある差別化された商品の創出が求められています。これまでに花王は、「コンパクト洗剤アタック」、「化粧品「ソフィーナ」、入浴剤「バブ」などの特徴ある商品を開発して出してきました。本講演においては、体脂肪が気になる方向けに開発された機能性食用油「エコー」や緑茶「ヘルシア」の話題を中心に、花王における差別化された商品を生み出す研究風土についてご紹介したいと思います。

昭和62年化学科卒業、平成元年修士課程化学専攻修了、花王(株)生物科学研究所勤務

「新鮮であった大学院生の知の関心」

鈴木 淳

去る2007年7月12日、理学部同窓会寄附講座として「花王における差別化された商品の開発研究」という題名で、「エコー」や「ソフィーナ」の研究開発のウラ話をさせて頂きました。普段、一企業の研究所で働く身としては、学生の前で話をする機会がありませんので、どれだけ伝わるか不安でしたが、後日学生との感想を聴かせていただき、少しは理解してもらえたかなと安心しました(中には厳しい意見もあって、ハッとさせられました)。良い経験でした。思い返してみますと、私が化学科にいた20年ほど前には、社会人との接点などバイト以外ありませんでしたので、当時からこのような企画があれば将来の参考になったかもしれません。是非とも続けて頂きたいと思ひます。

最後に、お世話役の化学科の瓜谷真裕教授に感謝しますと同時に、理学部ならびに理学

部同窓会の益々の発展をお祈りいたします。

演題名：「花王における差別化された商品の開発研究」

講演要旨：消費者の嗜好性が多様化している昨今、メーカーとして他社よりも魅力ある差別化された商品の創出が求められています。これまでに花王は、「コンパクト洗剤アタック」、「化粧品「ソフィーナ」、入浴剤「バブ」などの特徴ある商品を開発して出してきました。本講演においては、体脂肪が気になる方向けに開発された機能性食用油「エコー」や緑茶「ヘルシア」の話題を中心に、花王における差別化された商品を生み出す研究風土についてご紹介したいと思います。

昭和62年化学科卒業、平成元年修士課程化学専攻修了、花王(株)生物科学研究所勤務

筆者の方は新鮮な感動を覚えた。講義を担当したのは、平成19年7月5日である。講義の題目は、「教育学研究における数理科学的方法の応用例——最近の教育問題と教育学研究の動向を踏まえて」と、少し長めの詳しい題を付けた。当日は、院生たちが畑違いの領域に興味を持ってくださるか、少々不安もあったが、講義に対する院生の反応は、幸い良好であった。

理学部化学科の瓜谷真裕先生から頂いた院生たちの感想は、主に2種類あった。一つは、院生たちが普段触れることのない教育学の内容が、彼らにとって新鮮であったこと。特に、院生自身が今後の進路選択を控えているだけに、フリーター・ニート問題や職業的発達などに関するキャリア教育に関心が高かった。「学生の時に少しでもキャリア教育について知れば、将来の職業選択や考え方が変わらなう」という感想が見られた。

二つ目は、教育学の研究に数学的方法が役立つこと、院生たちが教育学の研究と理系学問との共通性を感じたことである。これは、院生たちの高校までの進路指導では、教育学は文系との認識が強かったに意外であったように、現在、教育学においても、新しい研究方法の開発が必要となっており、一例として、データマイニングなどの統計的手法が注目されている。数学的方法は、文系的学問にも有効なのである。

また、少数ではあるが、教員志望の院生がいて、教育問題に関する内容が役に立ったとの感想が見られた。理系院生の講義ではあったが、教育学研究との接点を理解してもらうことができ、大学院生の知的関心に

筆者の方が新鮮な感動を覚えた。講義を担当したのは、平成19年7月5日である。講義の題目は、「教育学研究における数理科学的方法の応用例——最近の教育問題と教育学研究の動向を踏まえて」と、少し長めの詳しい題を付けた。当日は、院生たちが畑違いの領域に興味を持ってくださるか、少々不安もあったが、講義に対する院生の反応は、幸い良好であった。

理学部化学科の瓜谷真裕先生から頂いた院生たちの感想は、主に2種類あった。一つは、院生たちが普段触れることのない教育学の内容が、彼らにとって新鮮であったこと。特に、院生自身が今後の進路選択を控えているだけに、フリーター・ニート問題や職業的発達などに関するキャリア教育に関心が高かった。「学生の時に少しでもキャリア教育について知れば、将来の職業選択や考え方が変わらなう」という感想が見られた。

二つ目は、教育学の研究に数学的方法が役立つこと、院生たちが教育学の研究と理系学問との共通性を感じたことである。これは、院生たちの高校までの進路指導では、教育学は文系との認識が強かったに意外であったように、現在、教育学においても、新しい研究方法の開発が必要となっており、一例として、データマイニングなどの統計的手法が注目されている。数学的方法は、文系的学問にも有効なのである。

また、少数ではあるが、教員志望の院生がいて、教育問題に関する内容が役に立ったとの感想が見られた。理系院生の講義ではあったが、教育学研究との接点を理解してもらうことができ、大学院生の知的関心に

理学部同窓会寄附講座を始めた目的は二つ。一つは、学生へのエンカレッジメント。つまり元気づけである。世相を反映してか、最近の学生には自分の将来について不安を抱いたり、夢を持ちにくいという傾向があるようだ。そんな中で卒業生が活躍している様子をライブで聞くことは、大きな励ましとなるであろう。また、さまざまな業界の事情を聞くことは、就職活動の助けにもなる。大学院の科目として適当なのかつ声も聞かれそうだが、大学院学生のほとんどが民間企業に就職する現実を考えれば、このような科目が一つくらいはあっても良いだろう。実際、学生からの評判も上々のようで、以下にレポートから拾った声をいくつか紹介しよう。

「理学部同窓会寄附講座を始め」

化学科 瓜谷真裕

昨年度から、静岡大学大学院理学研究科の選択科目として「理学部同窓会寄附講座」がスタートした。これは、これまで卒業生を講師として迎え、自分の仕事について自由に語ってもらい、後輩にメッセージを伝えてもらうというのが狙いで、NHKの「よろこび先輩」を思い出していたら良かったと思う。ただ、持ち時間は一人あたり約1時間なので、講演主体ということになる。通年で数人にお話をしてもらい、これをすべて聞くことで1単位の講義としている。その名前が示すように、静岡大学理学部同窓会の支援のもとに展開されている。静岡大学理学部同窓会に、講演者の交通費を持ってもらっている。

「理学部同窓会寄附講座」を始めた目的は二つ。一つは、学生へのエンカレッジメント。つまり元気づけである。世相を反映してか、最近の学生には自分の将来について不安を抱いたり、夢を持ちにくいという傾向があるようだ。そんな中で卒業生が活躍している様子をライブで聞くことは、大きな励ましとなるであろう。また、さまざまな業界の事情を聞くことは、就職活動の助けにもなる。大学院の科目として適当なのかつ声も聞かれそうだが、大学院学生のほとんどが民間企業に就職する現実を考えれば、このような科目が一つくらいはあっても良いだろう。実際、学生からの評判も上々のようで、以下にレポートから拾った声をいくつか紹介しよう。

筆者の方が新鮮な感動を覚えた。講義を担当したのは、平成19年7月5日である。講義の題目は、「教育学研究における数理科学的方法の応用例——最近の教育問題と教育学研究の動向を踏まえて」と、少し長めの詳しい題を付けた。当日は、院生たちが畑違いの領域に興味を持ってくださるか、少々不安もあったが、講義に対する院生の反応は、幸い良好であった。

理学部化学科の瓜谷真裕先生から頂いた院生たちの感想は、主に2種類あった。一つは、院生たちが普段触れることのない教育学の内容が、彼らにとって新鮮であったこと。特に、院生自身が今後の進路選択を控えているだけに、フリーター・ニート問題や職業的発達などに関するキャリア教育に関心が高かった。「学生の時に少しでもキャリア教育について知れば、将来の職業選択や考え方が変わらなう」という感想が見られた。

二つ目は、教育学の研究に数学的方法が役立つこと、院生たちが教育学の研究と理系学問との共通性を感じたことである。これは、院生たちの高校までの進路指導では、教育学は文系との認識が強かったに意外であったように、現在、教育学においても、新しい研究方法の開発が必要となっており、一例として、データマイニングなどの統計的手法が注目されている。数学的方法は、文系的学問にも有効なのである。

また、少数ではあるが、教員志望の院生がいて、教育問題に関する内容が役に立ったとの感想が見られた。理系院生の講義ではあったが、教育学研究との接点を理解してもらうことができ、大学院生の知的関心に

筆者の方が新鮮な感動を覚えた。講義を担当したのは、平成19年7月5日である。講義の題目は、「教育学研究における数理科学的方法の応用例——最近の教育問題と教育学研究の動向を踏まえて」と、少し長めの詳しい題を付けた。当日は、院生たちが畑違いの領域に興味を持ってくださるか、少々不安もあったが、講義に対する院生の反応は、幸い良好であった。

理学部化学科の瓜谷真裕先生から頂いた院生たちの感想は、主に2種類あった。一つは、院生たちが普段触れることのない教育学の内容が、彼らにとって新鮮であったこと。特に、院生自身が今後の進路選択を控えているだけに、フリーター・ニート問題や職業的発達などに関するキャリア教育に関心が高かった。「学生の時に少しでもキャリア教育について知れば、将来の職業選択や考え方が変わらなう」という感想が見られた。

二つ目は、教育学の研究に数学的方法が役立つこと、院生たちが教育学の研究と理系学問との共通性を感じたことである。これは、院生たちの高校までの進路指導では、教育学は文系との認識が強かったに意外であったように、現在、教育学においても、新しい研究方法の開発が必要となっており、一例として、データマイニングなどの統計的手法が注目されている。数学的方法は、文系的学問にも有効なのである。

また、少数ではあるが、教員志望の院生がいて、教育問題に関する内容が役に立ったとの感想が見られた。理系院生の講義ではあったが、教育学研究との接点を理解してもらうことができ、大学院生の知的関心に

筆者の方が新鮮な感動を覚えた。講義を担当したのは、平成19年7月5日である。講義の題目は、「教育学研究における数理科学的方法の応用例——最近の教育問題と教育学研究の動向を踏まえて」と、少し長めの詳しい題を付けた。当日は、院生たちが畑違いの領域に興味を持ってくださるか、少々不安もあったが、講義に対する院生の反応は、幸い良好であった。

理学部化学科の瓜谷真裕先生から頂いた院生たちの感想は、主に2種類あった。一つは、院生たちが普段触れることのない教育学の内容が、彼らにとって新鮮であったこと。特に、院生自身が今後の進路選択を控えているだけに、フリーター・ニート問題や職業的発達などに関するキャリア教育に関心が高かった。「学生の時に少しでもキャリア教育について知れば、将来の職業選択や考え方が変わらなう」という感想が見られた。

二つ目は、教育学の研究に数学的方法が役立つこと、院生たちが教育学の研究と理系学問との共通性を感じたことである。これは、院生たちの高校までの進路指導では、教育学は文系との認識が強かったに意外であったように、現在、教育学においても、新しい研究方法の開発が必要となっており、一例として、データマイニングなどの統計的手法が注目されている。数学的方法は、文系的学問にも有効なのである。

また、少数ではあるが、教員志望の院生がいて、教育問題に関する内容が役に立ったとの感想が見られた。理系院生の講義ではあったが、教育学研究との接点を理解してもらうことができ、大学院生の知的関心に

「今回の講義はともにおもしろかったです。前日に寝た時間が遅かったこともあり、もしかして寝てしまおうのではないかと考えていたのですが、寝ることはできませんでした。とても話上手で聞きやすかったです。」

「毎回、同窓会寄付講義で話して下さる方が、『仕事が楽しい』といった姿勢を見せてくださるので、これから働いていくことが希望が湧いてきます。」

「最近では理科離れが進んでいるので、理学部出身の先生が必要であるという現状を知り、教員を目指す気持ちがさらに強くなりました。」

「静大出身の先輩方が様々な方面で活躍しているのは、在学生としても誇らしいです。」

「同じ院卒で女性と一言うかがって、身近に話を聞くことができました。」

「この講義を受講し様々な話を聞いたこと以外に自分の就職に対し真剣に考える時間を持つことがとても有意義で、これから就職を控えたM1にはとても参考になる良い授業だと思いました。」

「理学同窓会寄付講義」を始めた目的の一つは、卒業生つまずり同窓会会員と理学部とのつながりを深めることである。青春の数年間を過ごした大学だが、卒業後は訪れる機会が意外となく、年が経つにつれて、心が遠い存在となりがちなもの。しかし、現在の大学の様子を知らせてもらい、後輩にあたる在学生と交流の機会を持つてもらえれば、その距離を縮めたいと考えています。理学同窓会寄付講義は、その一環として、卒業生に提供できる場となるのではないかと、実際には始まったばかりですが、招待した卒業生も十数人に過ぎないが、これから末永く続けていき、より多くの卒業生に講演に来てい

ただければと思う。「この紙面には、平成19年度に講演をしてもらった卒業生にお寄せいただいた感想を掲載してあるので、是非、こちらもお読みいただきたい。」

「同窓会寄付講義」は毎年開講されるのだが、初年度に当たる平成18年度は、生物学と地球科学科の卒業生を、平成19年度はそれ以外の学部の卒業生を講師としてお招きした。平成20年度は、再び生物学と地球科学科の卒業生に来ていただく年というところになる。お呼びする講師だが、これまでは、世話人になった教員が、自分の元指導学生など個人的つながりのある卒業生に声をかけて運営してきた。それはそれで良いのだが、個人的なルートには限界があるし、閉じたような印象を持たれるかもしれない。そこで、これからは従来のやりかたとともに、自薦・他薦により公募をして、できるだけ多くの卒業生を広く受け入れていきたいと思う。みなさまの積極的な応募を期待しています。窓口は平成20年度の世話教員。連絡先は下記の通り。

生物科学科 塩尻信義 (shinshi@ipc.shizuoka.ac.jp, 054-238-4780)

地球科学科 和田秀樹 (showada@ipc.shizuoka.ac.jp, 054-238-4791)

「HC計画」  
最高エネルギーのビームで  
最極微の世界を探る  
CERN(欧州合同原子核研究機構)で建設が進んでいる、LHC(Large Hadron Collider)加速器は2008年中に完成し、人類史上で最高となる重心エネルギー14兆電子ボルト(TeV)の陽子-陽子衝突実験が始まる。

LHC加速器の建設に責任を持つCERNは、1954年に欧州12ヶ国が共同出資して素粒子と原子核物理の研究のためにジュネーブとフランスの国境に設立された。現在CERNの加盟国は欧州20ヶ国となり、各国の国民総生産に比例して研究所の予算を加盟国が負担している。

素粒子の研究は、1960年から1970年第二飛躍的に躍進し、強い相互作用、電磁相互作用、弱い相互作用を性格に記述する標準モデルが確立した。物質粒子として6種類のクォークと6種類のレプトンが見つかっている。さらにそれらの間に働く3種類の相互作用(強い力、電磁力、弱い力)を媒介するゲージ粒子としてグルーオン、光子及びW、Zボソン(W±, Z0)が存在し詳しく調べられている。これまでに蓄積された膨大な量の実験事実によつて、1電子ボルトの分子・原子のレベルから100キガ電子ボルトを超える高エネルギー減少に至る12桁もの広大なエネルギー領域で標準モデルによる計算が非常に高い精度で正しいことが確認されている。標準モデルに関する研究によつて20名以上の研究者がノーベル物理学賞を受賞して来た。

しかし標準モデルの中で、また実験的に実証されていない謎がひとつだけ残っている。それはヒッグスメカニズムという最も根源的な部分である。電磁場が存在すれば光子があるように、自発的対称性の破れ(Spontaneous Symmetry Breaking, SSB)を引き起こすヒッグス場が存在するならばヒッグス粒子が最低1種類は存在する。ヒッグス粒子はそれ自体が質量を持つが、標準モデルの範囲ではその質量は予言でき

ない。しかしおおよその見当はつく。SSBを引き起こしてヒッグス場のポテンシャルを最低にする真空のエネルギーは真空期待値と呼ばれ、246キガ電子ボルトである。ヒッグス粒子の質量もこのSSBのエネルギースケール付近にあると予想される。100から300キガ電子ボルトあたりだろうと示唆する多くの理論的な予想と、量子補正を使った間接的な実験的証拠がある。予言された範囲を含む1兆電子ボルト以下の質量領域にわたってヒッグス粒子を探ることがLHC計画の主目的である。この実証によりクォークやレプトンの質量起源を説明することも可能となる。

# 技術情報

中教授はさらに、ヒトの皮膚から万能細胞を作り出すのに成功し、2007年11月に発表された。

培養ES細胞を皮膚など望みの組織に誘導するには、ES細胞の遺伝子活性や周辺環境からのシグナルを調整する必要があり、カリフォルニア大学バークレー校のヤン(Wingene Yang)とサンフランシスコにあるグラッドストーン心臓血管疾患研究所のコンクリン(Bruce R. Conklin)は、ES細胞に極細シリコン細線を埋め込んで細胞を育てることに成功し、こうした環境シグナルを与える新手法を示した。ナノ細線を通じて適切な電気パルスや化学薬品を送り込めば、幹細胞が特定の組織タイプに分化するように誘導できると見ている。

ES細胞の分化を制御する研究の一方で、成体幹細胞が未分化のまま維持される理由も探られている。ハーバード大学医学部のマキオン(Michael D. Mackinnon)は2007年、p63という遺伝子の活性が、幹細胞を未分化状態に保つのに重要な役割を演じていることを示した。少なくとも、上皮細胞に分化するタイプの幹細胞については確かだ。皮膚や前立腺、乳房、胸腺などはこのタイプの細胞からできている。

ハーバード幹細胞研究所のイガン(Kevin Eggan)らは貴重な卵子の代役として、余分な染色体を持つ胚を使った。こうした異常な胚は、顕微鏡精の際に2個の静止面卵子と結びついて自然に生じるものだ。エガンらは、異常な胚から染色

体除去して新しい遺伝物質を導入すると、通常の受精卵とほぼ同様にうまく成長し、正常と見られるES細胞を作り出すことを発見した。

今後、2009年度からの製造開始に向けて詳細設計を行い、2010年度の稼働、2012年の完成を目指す。

※10P.10  
平成18年科学技術白書より

環境ホルモンの新作用分子発見  
徳元准教授は、金魚を使う卵の形成過程に及ぼす環境ホルモンの影響を研究する中で、排卵過程に注目した。卵巣の中では普通、卵の成熟を誘起する体内のステロイドホルモン(プロゲステロン)が卵子の表面にある膜受容体に作用し、卵成熟と呼ばれる卵の減数分裂を引き起こす。その後、減数分裂を終えた卵は、覆っていた細胞膜から抜け出して排出される。さまざまな物質を試した結果、ジエチルステルベストル(DES)という環境ホルモン物質が体内のホルモンと同じ働きをすることがわかった。

「これまでの研究については2004年、米国の科学誌「PANS」誌にすでに論文を発表している。引き続きその働きが卵子のどの部分に作用するのかを調べる研究を進め、ステロイド膜受容体を発見した米岡・テキサス大のビーター・トーマス教授と共同研究に取り組んだ。

今回開発するシステムは、スカラ部とベクトル部で構成する複合汎用スーパーコンピュータシステム。複雑系問題、多階層問題などシミュレーションの革新を先導する計算環境を提供する。また、45nm半導体プロセス、光インターコネクトなどの最先端技術を採用し、省電力、省スペースを実現しながら、LINPAC性能10ペタフロップスの達成に加え、アプリケーションの実行でも世界最高性能を目指す。

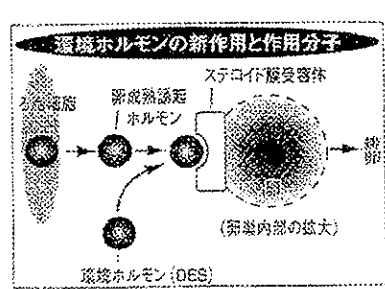
今後、2009年度からの製造開始に向けて詳細設計を行い、2010年度の稼働、2012年の完成を目指す。

※10P.10  
平成18年科学技術白書より

環境ホルモンの新作用分子発見  
徳元准教授は、金魚を使う卵の形成過程に及ぼす環境ホルモンの影響を研究する中で、排卵過程に注目した。卵巣の中では普通、卵の成熟を誘起する体内のステロイドホルモン(プロゲステロン)が卵子の表面にある膜受容体に作用し、卵成熟と呼ばれる卵の減数分裂を引き起こす。その後、減数分裂を終えた卵は、覆っていた細胞膜から抜け出して排出される。さまざまな物質を試した結果、ジエチルステルベストル(DES)という環境ホルモン物質が体内のホルモンと同じ働きをすることがわかった。

「これまでの研究については2004年、米国の科学誌「PANS」誌にすでに論文を発表している。引き続きその働きが卵子のどの部分に作用するのかを調べる研究を進め、ステロイド膜受容体を発見した米岡・テキサス大のビーター・トーマス教授と共同研究に取り組んだ。

今回開発するシステムは、スカラ部とベクトル部で構成する複合汎用スーパーコンピュータシステム。複雑系問題、多階層問題などシミュレーションの革新を先導する計算環境を提供する。また、45nm半導体プロセス、光インターコネクトなどの最先端技術を採用し、省電力、省スペースを実現しながら、LINPAC性能10ペタフロップスの達成に加え、アプリケーションの実行でも世界最高性能を目指す。



ステロイド膜受容体はもと

もと、天然のホルモンが作用する受容体で、環境ホルモンも作用するのは、という仮説のもと、がん細胞を使った遺伝子導入実験などを繰り返して、DESがステロイド膜に作用する働きを突き止めた。

卵の形成過程では、卵を成長させる段階でエストロゲンが、排卵直前からはプロゲステロンが分泌される。ほとんどの環境ホルモン物質はエストロゲンと似た働きをしているが、今回の研究では、初めてプロゲステロンに似た働きをする環境ホルモンを見つけたことに成功した。

DESの作用はこれまで卵成熟のみを誘起することが明らかになっていて、卵成熟のみを誘起された卵は排卵されず、卵巣内にたまり過熟卵となつて死んでしまう。もし、このような環境ホルモン物質が自然界に存在すれば、過熟卵の増加を引き起こす可能性があるという。

徳元准教授は今回の発見によつて、プロゲステロンの薬理作用の理解が進めば、新薬開発のきっかけになる」と期待する一方、「今後はプロゲステロンに似た作用をする環境ホルモンも有害物質として考慮すべき」と指摘する。

環境ホルモン問題の第一人者で基礎生物学研究所・岡崎統合バイオサイエンスセンター(岡崎市)の井口泰泉教授は「魚の卵成熟を促進させる物質を見出す方法ができ、新たな卵成熟因子の探索や魚の卵の膜受容体に結合して卵成熟に影響を及ぼす物質の探索にも貢献できる」と研究を評価している。

(5)月静岡新聞記事より  
※この論文は、内分泌分野で世界有数の専門雑誌「エンドクリノロジー」誌7月号に掲載された。

# 窓の窓

恩師の退職に際して感じたこと

太田英将

地球科学科4期生として卒業して四半世紀が過ぎた。同じ学科の先輩が少なかったこともあって、卒業後、大学時代のつきあいは同級生のほんの一部に限られていたように思う。このたび、私の指導教官をしていただいた新妻信明先生が定年退職されるにあたり記念祝賀会を企画したが、同じ研究室の卒業生ですら連絡先がわからず、日頃の疎遠を恥じるばかりだった。

例えば、卒業後地質コンサルタント企業に入社し、その後独立開業、結婚、子育てなどあったしながらも、13年前には神戸の大地震も経験した。40歳前後から、自治会、PTAなど地域の方々との接点が多くなり、最近では高校の同窓会などの役割もでてきた。そうしたときあいなの中で、以前は仕事や家庭のこと以外は「忙しい」を理由にしてあまり関わってこなかったが、実際には時間がなかったわけではなく精神的な余裕がなかったというところに気づかされた。あと2年で50歳になる。時代の変化がめまぐるしく、なにかと「忙しい」に逃げ込みがちだが、物質的・経済的なものとは違った人生の豊かさにもっとと関心を注いでいきたいと思っている。

(昭和57年地球科学科卒)

## 西安城壁の上部を

高塚芳弘

安定門(西門)から反時計回りに5人(男3、女2)で歩きました。距離が13.74kmとありましたので、本気であれば2時間半位で踏破できるのですが、その計画の無かった人を誘ってだったので、正味4時間15分かかりました。上部は外側に約180cm、内側に約80cmの高さの壁(厚さはレンガ1個分の44cm)があり、その間のレンガ敷きの平面は雨水を内側に流すために少しだけ傾斜しています。外側の壁近くに定間隔にポールが立てられていて、西面ではポールに固定された金属製の白虎が赤いぼんぼり風の飾りを3つぶら下げた形ですらつと並んでいました。固定された動物は、南面は朱雀、東面は青龍、北面は亀の上に蛇が乗った形の玄武です。

永寧門(南門)の直く東側にある文昌門で一時内側に降り、西安碑林博物館の界隈を散策し、昼食タイムをとりました。安遠門(北門)付近で城壁上部の幅を測ってみると、レンガ(44×22×10cm)が32.5個のりしろ分ありましたので約15mです。高さが約12m、底部の幅が15×18mというところでしたので、城壁の断面は正方形に近い形をしていることになります。5年前には西安駅付近の城壁は無かったのですが、今回は完全に繋がっており、しかも黒灰色のレンガが見かけ上昔のままの様子で、どこから新しくなったのか全然分かりません。現在南東上部付近を修復していましたが、完成したら同じ様になるだろうと思います。一周しながら上から見た城壁に近い内側の町並みの雰囲気は、西側が

全体的に開けている感じがします。シルクロードに向く方向だからかなのでしょうか？

さて、この散歩は全部で6時間43分かかり、天候は曇霧、12月末でしたが氷点下ではなく、思ったより寒くはありませんでした。また、内側の壁近くにある浅い排水溝付近は水平に近く、ここを主に歩いたので余り疲れませんでした。なお、入場料は40元(約640円)で、文昌門での交渉の結果最初の入場料だけで済みました。

(化学科昭和45年卒)

## 三重野哲教授がJJAP編集員に就任

を受賞

物理学科の三重野哲教授は、Japanese Journal Applied Physics (JJAP) の編集員に就任し、その功績を表彰する。2月14日開催の社団法人に本応用物理学会の定例理事会において、JJAPの編集員出版に対する4年間の貢献が評価された。JJAPは、応用物理関係の英文の研究論文を収録した学術雑誌である。三重野教授はフラーレンの研究者として著名で、授賞式は平成19年4月12日に行われた。

## 理学部同窓会 役員会報告

第1回役員会

6月30日(土)10時  
場所 フランセ3F  
出席者 浅野会長、他7名  
議題

- 1、理学部の概況について
- (1)同窓会連絡会の打合内容
- (2)サイエンス・カフェin静岡を産学交流センターで開催
- 2、平成19年度の予定
- (1)理学部・大学の行事予定
- 8月初期オープンキャンパス
- 5-7月同窓会寄付講座
- 化学科が担当で「物質化学」がテーマ、7回実施、4回済
- 11月下旬 大学祭
- 「コンピュ・アクセス調査隊」資料の公開を検討中
- 3月下旬 卒業式
- (2)卒業論文抄録集(4号)発行
- (3)会報第23号の発行
- (4)同窓会役員会
- 次回は12月28(金)18時より、会費2千円の予定。

その他に議題が発生すれば臨時の会議を開催する。  
3、理学部内事務所の運用  
(1)関さんの結婚に伴う後任元教室職員の大石さん(案察)の就任  
(2)外線電話の開設を推進  
4、名簿について  
(1)次回発行分より理学部理事卒業生氏名を名簿に記載。

(2)文理(理系)卒業生の各学科の代表者と連絡の取れたものは、住所を併せて記載する。  
(3)退官教員及び旧職員氏名を記載する。  
(4)次回会合に、連絡のついた文理学部(理系)卒業生を招待。  
5、会報の内容充実について  
(1)第22号は、理学部の教職員の協力が大。もう少し卒業生からの寄稿を募りたい。  
(2)B4版4頁を6頁×8頁に。  
(3)理学部内の研究動向、および創造科学大学院の紹介を特集員として掲載したい。  
6、その他  
(1)同窓会の役員の職務分担を見直し、再度下記の役員を設けてはどうか。  
①会報編集幹事、②会計幹事、③広報幹事、④総務幹事、⑤講演会実行委員長、⑥同窓会連絡係(各学科各学年のまとめ役)

(2)最近、同窓会報が旧職員に送付されていない。名簿を整備し、次号より送付する。  
(3)実質的な事務所の所在は、会長の自宅になっている。これを理学部内に移し、郵便振込金融機関の通帳等の連絡先を理学部内にし、会長が交代したときの変更の手続きが容易になるようにしたい。

(4)同窓会の活動状況、特に寄附講座などの状況についてHPを随時更新が必要。  
(5)大学祭のときに、同窓会の協力事業として、秋季オープンキャンパスの協賛はどうか。  
(6)理系教員ネットを活用して、理学部および理学部同窓会の活動状況を連絡すること。  
(7)同窓会活動に、文理(理系)の諸先輩の力を借りること。  
(8)旧版名簿の在庫については、浅野が切断焼却処分を実施。  
(9)理学部の各種教材の老朽化が進んでいる。更新のため寄附集め等の活動を考えて。  
○第2回役員会  
12月29日(土)17時  
場所 入船館南店  
出席者 浅野会長、他13名、(懇親会参加)3名  
議題

1、会報の発行  
(1)会報原稿について  
・定年退官教員挨拶(三重野)  
・新任教員の紹介(三重野)  
・寄附講座講師の原稿(瓜谷)  
・同窓会連絡会の活動(和田)  
・同窓会役員会の報告(浅野)  
・同窓生の原稿(各役員)  
・2007年度理学部「三」(総務係佐藤さんに依頼)  
・各学科の活動内容  
・平成21年度開始予定のインターンシップ関連記事  
・技術情報

①サイエンスアメリカンの2007年ベスト50より  
②その他のトピックス  
・編集委員は、未決定。  
2、卒業論文集の状況  
・進捗状況 3月卒業時(3/22)に配布できるようにする。  
3、大会館の活用について  
(1)キャンパス・ミュージアム  
・大学訪問者への案内・宣伝に利用できるものが欲しい。  
・理学部B棟展示場の移転  
・現行施設を保管施設とする  
・他の学部にも、大学の歴史となる装置等の提供呼びかけ  
・企画展の開催等で学芸員資格取得の訓練施設として活用  
・OBのボランティアの協力  
(2)土曜・休日の会館のOBボランティアによる運営  
・文科系サークル(オーケ、合唱等)の練習会場としての運用。  
・大会館の所在のアピール(定期的なミニコンサート等)。  
(3)全学同窓会事務局の移転  
(4)理・農・人文学部同窓会事務局の設置  
4.その他  
(1)理学部同窓会名簿への文理学部理系OB名の掲載について  
・次回名簿発行までに、数学科の意見をまとめる。(深見)

静岡大学理学部同窓会会計報告(平成18年度)		2007年3月	
一般会計			
<b>収入の部</b>			
前年度繰越金	4,953,342		
年会費・寄附	3,083,000		
名簿代	57,500		
受取利息	31		
雑収入	101,800		
<b>合計</b>			8,138,173
<b>支出の部</b>			
通信費	481,320		
印刷費	2,344,912		
送料・送料	174,184		
備品	104,829		
総務	345,357		
特別講義	400,000		
事務経費	717,100		
雑費	59,628		
<b>合計</b>			4,627,330
<b>差引</b>			4,953,467

印刷費:会報(No.21・No.22)印刷、抄録集(No.2)増刷、名簿・抄録集(No.3)印刷  
特別講座支援:H16年、H17年の2年分  
以上報告いたします。  
平成19年3月31日  
会計兼会計担当:浅野安人  
監査の結果、報告のとおり相違ありません。  
監査:佐藤洋一、松山初男

同窓会寄付講義  
講師募集  
平成18年度より理学研究科の講義の一つとして、理学部同窓会寄付講義が解説されています。(学部の学生も聴講します)。この講義は、研究機関や企業・中学校等で活躍中の理学部同窓会の会員により、企業や研究所、教育現場などで今何をしていのか、働く現場ではど

## 事務局だより

○今年の静岡の冬は、昨年よりもさらに暖かかったのですが、2月に入ると寒さが戻ってきました。しかし、例年よりも早く竜爪山に雪が積もり、早い春の訪れを告げています。独立法人化してから4年が経過し、この春は、国立大学静岡大学の最後の博士課程修了生を、そして国立大学法人静岡大学の最初の卒業生を送り出します。  
○世代替わりが進み、昭和がだんだん遠くなりつつありますが、「三丁目の夕日」の世代としては、何時までも探究心を失わないで若々しくいたいものだと思っています。  
○理学部では、学外公開講座として「サイエンス・カフェ」を、毎月最終木曜日に、新静岡センター南側にある「ガサート」6階の産学交流センター会議室で実施しており、約1年が経過しています。時間は夕方6時からです。都合のつく人は一度顔を出してみてください。お茶とお菓子つきで、会費・参加申し込み等は不要です。  
○今年、理学同窓会事務局の関さんが、結婚して静岡を離れたため、その交代で大石が手伝うことになりました。よろしくお願います。

○昨年発行した名簿から、電話番号を削除しました。名簿ご希望の方および友人の電話番号を知りたい方は、学簿番号を記載して、事務局までお問い合わせください。事務局のメールアドレスは、左記のとおりです。  
●この会報の愛称を募集します。会員皆様方からのご応募をお待ちいたします。  
schin@ipc.schizuoka.ac.jp  
野口・大石